

再び旋風を巻き起こすことはできるのか。前広島県安芸高田市長の石丸伸二氏が率いる地域政党「再生の道」。同党は、今年六月一三日告示・一二日投開票の東京都議選（定数一二七人）で三六選挙区に四五人（四月二五日現在）の公認候補を擁立することを明らかにした。全国的な知名度がほとんどなかった石丸氏は昨年七月の都知事選で次点に食い込み、一躍「時の人」になった。再生の道は、党としての共通政策を掲げておらず、候補者選挙もインターネットで公開するなど、異例ずくめの前哨戦を展開している。

「巳年」は、三年に一度の参院選と四年に一度の東京都議選が重なる年。東京都議選は、直後に行われる参院選の「先行指標」などと言われ、参院選の前哨戦に位置付けられている。

その重要選挙を前にした今年一月、石丸氏は地域政党「再生の道」の設立を発表。党名には「日本をよみがえらせる」という意味を込めたと説明し、都議選の全四二選挙区で候補者擁立を目指す考えを明らかにした。

驚かされたのは、石丸氏が「政策は各候補が主張すべきものを主張してもらう」などとし、党としての共通政策を掲げなかったことだ。当選後の議会議決も党議拘束をかけない考えを示す一方、唯一の綱領として「任期は最長二期八年」を掲げ、多選を禁じた。

この理由について、石丸氏は「能力もな

再生の道、異例の前哨戦

いのに議員の椅子にしがみつく『政治屋』を一掃したい」などと説明。さらに、「『転職しようかな』『違う部署に異動希望を出そうかな』という感覚で政治の世界に接してもらいたい」と気軽に応募するよう呼び掛けた。

この呼び掛けに対し、候補希望者が全国から殺到し、一一二八人が集まった。一部報道によると、都議会会派の裏金事件で揺れる自民党は、年明けからホームページなどを通じて多摩地域の四選挙区で候補を募ったところ、二月の締め切りまでに申し込みはゼロだったとされる。候補者は「量」より「質」が重要だとはいえ、再生の道が一〇〇人以上も候補希望者を集めたことに、純粋に驚いた人も多いのではないだろう。

一一二八人のうち三五四人が書類選考を通過し、適性検査に進んだ。その後、一一八人が最終三次選考に残り、インターネットで公開される最終面接を受けた。面接官は石丸氏本人のほか、別途公募した一六、二四歳の都民らが担当。最終面接などの様子は計五〇本の動画となり、総再生回数は五八五・八万回に上った。

ちなみに、合格者の年齢は二五〜七〇歳で、女性の割合は一五％。年収は「八〇〇万円以上」が七七・一％、「一〇〇〇万円以上」が六四・六％だったという。可否の判断について、石丸氏は「仕事ができるかという観点で審査した」と説明している。

北海道内に目を転じると、立憲民主党や

国民民主党の道連などで構成される「民主連絡調整会議」は今夏の参院選で二議席獲得を目指し、候補者の擁立を両党で合わせて二人にすることで合意。国民民主党道連は当初、自民党所属の帯広市議を擁立する方向で調整に入ったが、「道連内を一本化できなかった」などとして擁立を断念した。その後、資産運用アドバイザーの男性を擁立することを決め、参院選での立憲と国民の「共闘態勢」が固まった。

市民目線で言えば、これらの候補者調整の間、なぜ自民所属の市議が候補に上がり、断念することになったのか、そして、新たな候補はどのような経緯、理由で候補に決まったのかは全く分からない。それは今回のケースだけでなく、ほとんどの国政選挙でも同じであり、既成政党の候補者選考は「ブラックボックスと化している」と言っても言い過ぎではない。

石丸氏の取り組みは、旧来の候補者選考と異なり、透明性が高く、かつ多くの人が政治や選挙に目を向けるきっかけになっている。この点は大いに評価するべきだと思う。しかし、共通政策がないことなど問題点も多く、かつ石丸氏本人が毀誉褒貶相半ばする人物であることも考え合わせると、東京都民にどの程度受け入れられるかは不透明だ。

再生の道は参院選でも候補者を立てることを決めており、仮に都知事選に続いて、都議選、参院選と旋風を起せば、その手法は今後の選挙にも大きな影響を与えそうだ。

△陽▽